

形容詞の文体論的考察

——連用用法を中心に——

秋 元 美 晴

日本語の形容詞の機能は、述語となる機能（述定用法）、連体修飾語となる機能（装定用法）、連用修飾語となる機能（連用用法）の3つに分けられる。4つのジャンルの作品から収集した資料をもとに、この3用法の分布をジャンルによる相違ということも考慮し、概観した。ついで、動詞を修飾する連用用法について、どのような形容詞に連用用法が多いか、また、その際、どのような動詞と共起関係をなすかという2点について分析し、これらがどの程度ジャンルと関連があるかを考察した。

キーワード：形容詞、連用用法、ジャンル

0. はじめに

本稿の目的は2つある。1つは、形容詞の主な機能である連用用法、述定用法、装定用法^(註1)の3用法の分布状況の違いがジャンルの違いと関連があるかどうかということをも明らかにすることである。もう1つの目的は、形容詞の連用形が動詞を修飾する場合、どのような形容詞に連用用法が多く見られるか。また、それらの形容詞は、どのような動詞と共起することが多いかということをもジャンルとの関連から探ることである。

1. 先行研究

川端（1976）は述定述語・装定述語としての形容詞について言及している。

恵泉女学園大学 人文学部紀要 第12号 pp.87

形容詞の文体論的考察
——連用用法を中心に——

秋 元 美 晴

また、橋本・青山(1992)は形容詞の現れる構文を中心に連用、連体、終止の3つの用法と各用法間の関係について考察しており、宮島(1994)はそれを検証し発展させた論文である。連用形の副詞的用法について論じたものにはソーントン(1983)や仁田(1993)、清水(1996)などがある。このほか、推理小説に見られる形容詞の述定用法と装定用法の分布を属性形容詞、評価・判断形容詞、感情・感覚形容詞に分けて考察した仁田(1998)などがある。しかし、これまでの研究には、形容詞の3つの用法の分布や連用用法の使われ方をジャンルとの関連から論じたものはないようである。

2. 資料

ジャンルを純文学系と、大衆文学の代表としてここでは推理小説とSF、そしてノン・フィクションの4つに分類した。各ジャンルから以下のようによく知られており、また入手しやすい作品を3作品ずつ選んだ。

ジャンル	作品名	作者	刊行年	利用した版
純文学系	僕って何	三田誠広	1977	河出文庫版
	カイのおもちゃ箱	辻 仁成	1991	集英社版
	レッスン	五木寛之	1992	新潮文庫版
推理小説	殺意はさりげなく	赤川次郎	1990	角川文庫版
	東京駅で消えた	夏樹静子	1992	新潮文庫版
	生者と死者	泡坂妻夫	1994	新潮文庫版
SF	第四間氷期	安部公房	1959	新潮文庫版
	夢魔の標的	星 新一	1964	新潮文庫版
	朝のガスパール	筒井康隆	1992	新潮文庫版
ノン・フィクション	母は枯葉剤を浴びた	中村梧郎	1983	新潮文庫版
	死角—巨た事故の現場—	柳田邦男	1985	新潮文庫版

それぞれの冒頭から100ページまでに使用されている形容詞（『母は枯葉剤を浴びた』は写真が多く挿入されているために100ページ相当分）を収集し、3つの用法に分類した。分類は形態統語論的に行った。例えば、「試験場は暑く、受験生たちは大変だった」という文において、「暑く」は形態的には形容詞の連用形でも、統語的には述定用法なので連用用法とせず、述定用法とした。また、「暑くなる」や「厳しくする」のように連用形が「なる」「する」の動詞と共起する場合は、全体が動詞化していると考えられるために連用用法としなかった。なお、「勘が鋭い子」のように「鋭い」が「勘」の述語であり、なおかつ「勘が鋭い」が「子」を修飾しているような場合は省いた。同じように主語が明らかでないものや「～でもいいです」「～たほうがいいです」の「いい」なども省いた。

3. 連用用法・述定用法・装定用法の分布と異なり形容詞数

3-1. 全体から見た3つの用法の分布

表-1は12作品から集めた2,530のデータを連用用法、述定用法、装定用法に分類したものである。

3つの用法の具体例は次のとおりである。（「純」「推」「S」「ノ」は、純文学系、推理小説、SF、ノン・フィクションの省略を表したものである。）

a. 連用用法の例

(1) ～、まるでフォーカルプレーン・シャッターが素早く上下するようにまつ毛が動いた。 純（『レッスン』p.32）

(2) 私はうなずき、軽く話しかけた。 S（『夢魔の標的』p.7）

b. 述定用法の例

(3) なんとその量の多かったことか。 純（『カイのおもちゃ箱』p.8）

(4) 今は時期が悪いから売買せず、もうしばらく持っていたら～。

S（『朝のガスパール』p.45）

c. 装定用法の例

表-1 分布

(数字は例数)

	作 品 名	連用用法	述定用法	装定用法	計	異なり語数
純 文 学 系	僕って何	71(28%)	66(26%)	119(46%)	256(100%)	123
	カイのおもちゃ箱	92(33%)	59(21%)	129(46%)	280(100%)	98
	レッスン	65(25%)	56(22%)	134(53%)	255(100%)	101
		228(29%)	181(23%)	382(48%)	791(100%)	
推 理 小 説	殺意はさりげなく	44(26%)	48(29%)	76(45%)	168(100%)	69
	東京駅で消えた	38(22%)	53(30%)	85(48%)	176(100%)	72
	生者と死者	74(30%)	62(25%)	110(45%)	246(100%)	96
		156(26%)	163(28%)	271(46%)	590(100%)	
S F	第四間氷期	52(24%)	65(30%)	100(46%)	217(100%)	98
	夢魔の標的	51(23%)	64(29%)	107(48%)	222(100%)	97
	朝のガスパール	50(21%)	95(41%)	88(38%)	233(100%)	95
		153(23%)	224(33%)	295(44%)	672(100%)	
ノ ン ・ フ ィ ク シ ョ ン	母は枯葉剤を浴びた	38(20%)	66(34%)	90(46%)	194(100%)	74
	死角ー巨事故の現場ー	29(23%)	65(52%)	30(24%)	124(100%)	36
	人はなぜボケるのか	38(24%)	82(52%)	39(25%)	159(100%)	60
		105(22%)	213(45%)	159(33%)	477(100%)	
	合 計	642(25%)	789(31%)	1107(44%)	2530(100%)	

(5) ～二九歳の若い母親が生んだようです。

ノ (『母は枯葉剤を浴びた』 p. 76)

(6) 「～, 心を静める一番いい方法なのです」

推 (『生者と死者』 p. 11)

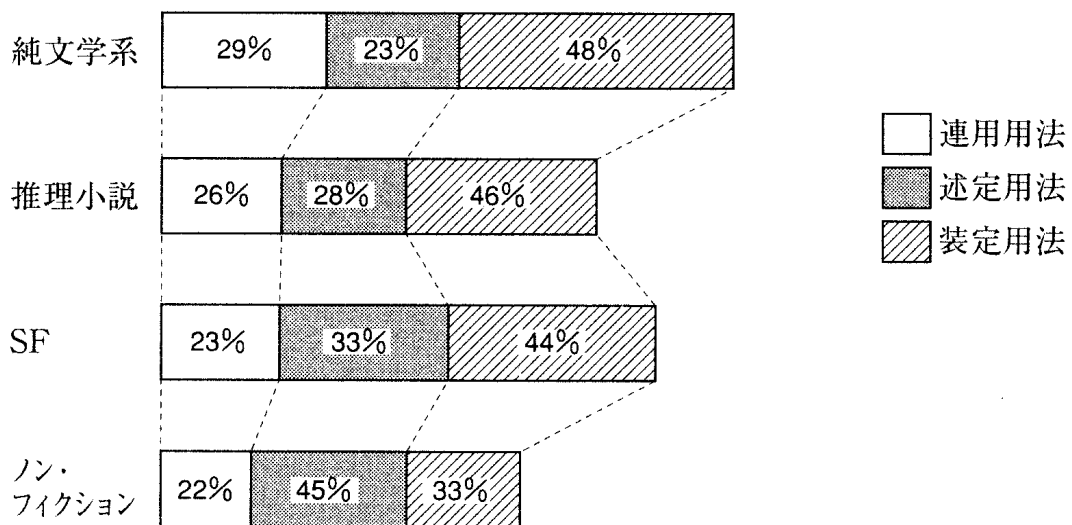
表-1からわかるように、割合の大きい順に並べると、純文学系の3作品はすべて装定用法→連用用法→述定用法となるが、他のジャンルはそれぞれ1作品が他の2作品と異なった割合を示している。推理小説は『殺意はさりげなく』と『東京駅で消えた』は、装定用法→述定用法→連用用法の順であり、『生者と死者』だけが装定用法→連用用法→述定用法の順となる。SFも2作品は装定用法→述定用法→連用用法の順で、『朝のガスパール』のみ述定用法→装定用法→連用用法の順となる。ノン・フィクションも同じように2作品

は述定用法→装定用法→連用用法で、『母は枯葉剤を浴びた』だけが装定用法→述定用法→連用用法の順となっている。ジャンルが同じでも作品により多少の異同があるが、合計の欄を見ると分かるように3つの用法の中では装定用法が44%と最も高い。このことから形容詞の特徴的な用法は、やはり装定用法なのではないかと考えられる^(註2)。二番目に割合の高い用法は述定用法で31%を占めており、連用用法は25%と最も割合が低くなっている。

3-2. ジャンル別に見た3つの用法

次の帯グラフを見るとわかるように、ジャンルにより、また同じジャンルでも作品により形容詞の使用頻度は異なっているが、どのジャンルでも一定の割合を占めているのは連用用法である。各ジャンルの平均の欄を見ればわかるように、連用用法の割合の一番高い純文学系が29%であり、一番低いノン・フィクションが22%で、その差は7%とあまりない。それに対して、述定用法は純文学系は23%で、ノン・フィクションは45%で22%の差がある。装定用法も同じで、純文学系とノン・フィクションでは48%と33%で15%の差である。述定用法の割合の低い純文学系は、装定用法の割合が高く、反対に述定用法の割合の高いノン・フィクションは装定用法の割合が低くなっている。述定用法と装定用法の相対的關係は4つのジャンルに共通に見られ、これは述定用法と装定用法は相補的な關係にあることを意味しているといえる。

純文学系に装定用法の割合が高い理由は、純文学は主観的、直接的な表現形式が好まれるからであらうか。一方、ノン・フィクションに述定用法の割合が高いのは、客観的な描写が多いためだと考えられる^(註3)。しかし、個々の作品を見ていくと、同一ジャンルだからといって、3つの用法がいつも同じ割合であるわけではない。例えば、『母は枯葉剤を浴びた』は他のノン・フィクションの作品と異なり、述定用法が34%と装定用法より12%も少なくなっている。これはこの作品が他の2作品が客観的な事実を書いていくドキュメンタリータッチの作品であるのに対して、著者の感想が多く書かれ、また、会話文が多いためだと考えられる。



3-3. 異なり形容詞

表-1の右端は異なり形容詞数だが、最も多種類の形容詞を用いている作品は純文学系の『僕って何』で123語の形容詞が使われている。反対に最も形容詞の種類が少ない作品は『死角』の36語である。『僕って何』は『死角』の3.4倍の異なる形容詞を使用していることになる。予想されることだが、やはり純文学系に多くの異なる形容詞が使われており、また、形容詞の使用頻度も推理小説、SF、ノン・フィクションに比べかなり高いことがわかる。

(7) 背後の木造校舎の屋根の線に沿ったわずかな雲の切れ目から、束の間、くれないのなごりがのぞいていた頃から、中庭をとり囲んだ校舎全体がどす黒い影に塗りこめられるまで、もう長い時間、その方形の狭くるしい地面いっばいに、ものものしい武闘訓練が続いている。
純（『僕って何』 p. 33）

(8) アメリカのNTSB（国家交通安全委員会）の調査によると、主因は誘導路の氷結と強い横風であったが、副次的要因として、気象条件が悪化する中で機を出発させようとした運航管理者と機長の判断が問われた。
ノ（『死角』 p. 31）

ノン・フィクションの次に異なり形容詞数が少ないのは推理小説で、中でも『殺意はさりげなく』は69語で『東京駅で消えた』は72語と少ない。これは

殺人事件の真相をおっていく推理小説は、どちらかという表現形式がノン・フィクションに近いのかもしれない。推理小説の『生者と死者』と純文学系の『カイのおもちゃ箱』はSFの3作品と同じような数である。これは『生者と死者』がどちらかという、SFに近い内容であるためであろうか。

4. 連用用法の分析

4-1. 全ジャンル

初めに4つのジャンルに共通に見られる連用用法について概観していく。全ジャンルに共通に見られる連用用法のうち、使用頻度の高い形容詞の上位10位は次の10語である。

- | | | |
|----------------|-------------------|----------------|
| 1. いいーよく(88) | 2. 早いー早く(51) | 3. 大きいー大きく(37) |
| 4. うまいーうまく(32) | 5. ひどいーひどく(23) | 6. 激しいー激しく(21) |
| 7. 軽いー軽く(18) | 7. 何とないー何となく(18) | |
| 9. 強いー強く(17) | 10. くわしいーくわしく(16) | |

動詞を修飾する連用用法になる形容詞は数が限られていて、この上位10位の10種類で連用用法全体のちょうど50%を占める。

では、これらの形容詞の連用形はどのような動詞を修飾しているのでしょうか。第6位までの形容詞の連用形を見ていく。

まず、1位の「いい」の連用形「よく」だが、(9)~(12)のように〈十分に〉の意味で用いられる場合は、「わかる」「考える」「覚える」「見る」のようないわゆる認識動詞、知覚動詞と共起する例が88例中の約70%を占める。

(9) 「言っている意味がよくわからないわ。」 純 (『レッスン』 p.77)

(10) 「～。よく考えてみると、どうも矛盾している。～」

S (『第四間氷期』 p.48)

(11) 「なかなか、よく覚えておいでです。～」 推 (『生者と死者』 p.12)

(12) 前頁図4は、垂直尾翼の方向舵への油圧パイプの走り方を描いてあるが、よく見ればわかるように、～。 ノ (『死角』 p.20)

一方、「よく」が〈非常に〉〈大変〉の意味で用いられ、「打つ」のような動作動詞や「似合う」のような状態を表す動詞と共起する例は、全体の10%にすぎない。

2位の「早く」は51例あるが、「早い」の意味は大きく分けて、〈時間的に前である〉という意味と〈動作・作用の進行にかかる時間が短い〉という意味に分けられる。(13)と(14)は、前者の〈時間的に前である〉という意味で用いられている例である

(13) 「思ったよりはやく着いたわね。」 純 (『レッスン』 p. 61)

(14) 次の日は早く起きた。 S (『夢魔の標的』 p. 51)

後者の意味で用いられている例は(15)や(16)であるが、このうち(16)の「過ぎる」のように『分類語彙表』で移動・発着、追い・逃げなどのグループに属する動詞と共起する用例が全体の30%を占める。

(15) 「早く準備しろ！」 推 (『殺意はさりげなく』 p. 88)

(16) そうした時間は早く過ぎていった。 S (『朝のガスパール』 p. 70)

3位の「大きく」は、37例あるが、そのうち9例が(17)のように「うなづく」と共起している。「うなづく」は、『分類語彙表』で全身的動作のグループに属するが、このグループの動詞の例にはこのほか「目をみはる」の「みはる」がある。これらの10例のほか、(18)「息をする」のように『分類語彙表』では、生理現象を表す動詞と共起する例が4例あるが、これも含め〈動作の様子が大である〉ことを表している。

(17) 鈴木は感心したように大きくうなづいて、～。
推 (『生者と死者』 p. 45)

(18) 和田は肩で大きく息をしながら～。 S (『第四間氷期』 p. 97)

また、(19)や(20)は、「大きく」が『分類語彙表』で揺れ・振れのグループの動詞と傾斜・転倒のグループに属する動詞と共起している例で、この場合「大きく」は〈物の動きの様子が大である〉ことを示している。

(19) 機体はまるで反応を示さず、尻を大きく左右に振るダッチロールと～。
ノ (『死角』 p. 61)

(20) かなり酔いがまわっているらしく、レイ子は大きくよろめいて、僕

の身体に寄りかかった。

純（『僕って何』 p. 49）

このように動作や物の動きの様子が大きいことを示す例が22例と全体の60%を占める。

4位の「うまく」だが、全部で32例あった。全ジャンルに見られるが、(21)のように動詞「いく」と共起する例が9例あった。

(21) 手術がうまく行ったのだ。 ノ（『母は枯葉剤を浴びた』 p. 133）

〈望ましい状態が実現する〉という意味の「うまくいく」は、どのような場合でも望ましい状態が実現すれば使え、便利なので「うまくいく」でセットフレーズのように使われている。(22)の「うまく」も同様に〈好都合で望ましく〉の意味だが、この意味で「うまく」が用いられる場合は、さまざまな動詞と共起することができる。

(22) 「うまく当たればおなぐさみだな……。」 S（『夢魔の標的』 p. 10）

(23)の「うまく」は〈技術がたくみな様子をあらわす〉意味で用いられているが、(23)の「言える」のような可能動詞や動詞に「～することができる」がつく可能表現と共起することが多い。

(23) 「うまく言えませんが、古い記憶がふいに蘇ってくるような気持なんです。」 推（『生者と死者』 p. 32）

5位の「ひどく」だが、23例あった。『現代形容詞用法辞典』（p. 475）には、「ひどく」について以下の説明がある。

程度がはなはだしい様子を表す。ややマイナスよりのイメージの語。例のように「ひどく」という述語にかかる修飾語の形で用いられることが多く、この場合好ましい事柄についても用いられる。

しかし、好ましい事柄について用いられている例は、動詞との共起関係で見ると23例中1例もなかった。(24)の「恐がる」や(25)の「狼狽する」や「うろたえる」「しおれる」「いらいらする」のように『分類語彙表』の気分・情緒を表すグループの動詞で、その中でもマイナスの気分・情緒を表す動詞と共起する例が12例もあった。また、(26)の「見くびる」は、対人感情のグループの

動詞だが、これもマイナスの意味である。

- (24) 「確か……房子さんは近所に超能力を使う者がいる、とひどく恐がっていたそうですね。」 推 (『生者と死者』 p. 16)
- (25) 守衛は私を見ると、上半身すっぱだかの首に巻いた手拭を、ぐるぐるまわしながら、ひどく狼狽していた。 S (『第四間氷期』 p. 45)
- (26) ひどく見くびられた気がして、何となくやりかえす手だてはないかと～。 純 (『僕って何』 p. 19)

このように「ひどい」は、悪い感情を表す動詞とよく共起する。このほか、「疲れる」「のろのろする」「やられる」などの動詞とも共起する。「ひどく」が程度副詞のように使われても、「ひどい」の原義の〈むごい〉〈残酷である〉の意味がまだ残っているのかもしれない。

6位の「激しく」は21例あったが、このうち(27)の「揺さぶる」のように『分類語彙表』の揺れ・振れなどのグループの動詞と共起する例が9例見られた。〈勢いが強い〉の意味で用いられる「激しく」は、このほか(28)の動作動詞「叩く」や「送る」「接地する」のような動きを表す動詞と共起したり、(29)の「咳き込む」のような生理現象を表す動詞などいろいろな動詞と共起する。

- (27) 父親はとび起きて、カイの肩を激しく揺さぶったのだけれど、～。 純 (『カイのおもちゃ箱』 p. 17)
- (28) 「久米！開けろ！」と、宮入は怒鳴りつつ、ドアを激しく叩いた。 推 (『殺意はさりげなく』 p. 15)
- (29) ～、少量のソーセージの破片をとばして郡司は激しく咳き込んだ。 S (『朝のガスパール』 p. 64)

〈程度がはなはだしい様子〉を表す意味で「激しく」が用いられる場合は、(30)のように「反対する」「対立する」「責めたてる」などの賛成・許容に属する動詞やそのほか「おびえる」「撒く」「散布する」「息を切らす」など、いろいろな動詞と共起する。

- (30) 二人の結婚に激しく反対したのは吉田の父である。 ノ (『人はなぜボケるのか』 p. 20)

〈程度のはなはだしい様子〉を表す意味では「ひどく」と類義関係にあるが、

「ひどく」がマイナスの感情やマイナスの意味を表す動詞と共起することが多いのに対して、「激しく」はどのような動詞とも共起するので、その点から考えると本来の副詞により近いといえるかもしれない。

4-2. 各ジャンル

次に各ジャンルに見られる連用用法について見ていくが、最初にジャンル別に連用用法の頻度の高い形容詞の上位8位をあげる。このうち、以下では動詞との共起関係から見た特徴を述べるのに必要な「大きく」「くわしく」、また程度のはなはだしい様子を表す「激しく」「ひどく」「強く」「深く」について見ていく。

純文学系

() は例数

- | | | |
|-------------------------|-----------------------|-------------------------|
| 1. いいーよく(20) | 2. 早いー早く(19) | 3. ひどいー <u>ひどく</u> (15) |
| 3. 大きいー <u>大きく</u> (15) | 5. 強いー <u>強く</u> (12) | 5. 激しいー <u>激しく</u> (12) |
| 5. 軽いー軽く(12) | 8. うまいーうまく(9) | 8. 深いー <u>深く</u> (9) |
| 8. すばやいーすばやく(9) | | |

推理小説

- | | | |
|--------------------------|------------------------|------------------------|
| 1. いいーよく(34) | 2. 早いー早く(15) | 3. 強いー <u>強く</u> (6) |
| 3. うまいーうまく(6) | 5. 長いー長く(5) | 5. 激しいー <u>激しく</u> (5) |
| 5. くわしいー <u>くわしく</u> (5) | 8. 大きいー <u>大きく</u> (4) | |
| 8. ひどいー <u>ひどく</u> (4) | 8. 明るいー明るく(4) | |

SF

- | | | |
|-----------------|--------------------------|---------------|
| 1. いいーよく(18) | 2. うまいーうまく(14) | 3. 早いー早く(12) |
| 4. 何とないー何となく(8) | 5. くわしいー <u>くわしく</u> (7) | |
| 5. 軽いー軽く(7) | 7. ひどいー <u>ひどく</u> (5) | 8. 明るいー明るく(4) |

ノン・フィクション

- | | | |
|--------------|--------------------------|------------------------|
| 1. いいーよく(19) | 2. 大きいー <u>大きく</u> (13) | 3. 激しいー <u>激しく</u> (7) |
| 4. 早いー早く(5) | 5. くわしいー <u>くわしく</u> (4) | |
| 6. 白いー白く(3) | 6. 慌ただしいー慌ただしく(3) | |

6. 広いー広く(3)

6. 何とないー何となく(3)

6. うまいーうまく(3)

どのジャンルでも共通に見られる連用用法の多い形容詞は、「いい」「早い」「大きい」の3語である。このうち「大きく」はすでに4-1で述べたが、〈動作や物の動きの様子が大きい〉の意味で用いられる例が22例と、全体の60%を占める。これらは4つのすべてのジャンルに見られるが、これを具体的な〈程度の大である様子〉の意味であるとする、(31)(32)(33)のようにノン・フィクションにだけ見られる「大きく」が「とりあげる」「変化する」「貢献する」という動詞と共起する場合は、抽象的な〈程度が大である様子〉の意味で用いられているといえよう。このような例が4例あった。

(31) 問題は大きくとりあげられてはいない。

ノ (『母は枯葉剤を浴びた』 p. 29)

(32) 水平安定板の位置(迎え角)を示すデータが、瞬間的にポーンと大きく変化し、同時にその検知装置が破壊された。ノ (『死角』 p. 88)

(33) 「医療の発展に大きく貢献し、さらに～。」

ノ (『人はなぜボケるのか』 p. 89)

「くわしく」も4つのジャンルにわたって見られるが、(34)の「説明する」や「話す」のような発話動詞に属する動詞と共起する例が7例あった。

(34) ～、ミノルは鼻水をたらしながら、皆に何度も詳しく説明した。

純 (『カイのおもちゃ箱』 p. 66)

このうち、ノン・フィクションの2例は同じ発話動詞でもフォーマリテイの高い(35)「報告する」や(36)「述べる」が用いられている。

(35) 乗務員たちには状況を詳しく報告する余裕などほとんどなかったのだ～。

ノ (『死角』 p. 62)

(36) 柄沢は後に詳しく述べるが、～。ノ (『人はなぜボケるのか』 p. 24)

次に多いのは「見る」「聞く」などの知覚動詞と共起する例で5例見られた。推理小説には、(37)にあるように「調べる」や、また「たずねる」という意味の「きく」、「思い出させる」など内容の要請から生じると思われる動詞と共

起する例が見られた。

- (37) 「～、背後の事情を今後もう少しくわしく調べてみたいと考えております」
推（『東京駅で消えた』 p. 23）

このように「大きく」「くわしく」は、4つのすべてのジャンルに見られるが、ジャンルによってそれぞれ異なる動詞と共起することがわかった。

次に〈程度のはなはだしい様子を表す〉意味で用いられている「激しく」「ひどく」「強く」「深く」について見ていく。4-1で「激しく」と「ひどく」はすでに述べたように、「激しく」はすべてのジャンルにあらわれ、さまざまな動詞と共起する。それに対して「ひどく」はノン・フィクションには例が見られない。先にも述べたが、「ひどく」はマイナスの感情を表す動詞と共起することが多いため、ノン・フィクションのような中立的な内容には適さないのであろうか。「強く」は(38)のように〈動きの強さ〉を表している。

- (38) ～、首を左右に強く振る。 純（『カイのおもちゃ箱』 p. 10）

純文学系の12例のうち、6例が(38)のように動きの強さを表し、6例が(39)のように〈程度のはなはだしい様子〉を表している。

- (39) ～株式投資で儲けた話を聞かされ、強く勧められたのである。

S（『朝のガスパール』 p. 43）

しかし、〈程度のはなはだしい様子〉を表す意味で用いられても「強い」の原義である「力・技がすぐれていて他に負けない」の意味が残っているためか、完全には程度をあらわす副詞のようにはなりきれないのでであろうか。それがノン・フィクションでは使われにくいのだと考えられる。

「深く」は全部で13例あったが、原義である深さ・浅さについて用いられているのは2例であり、残りの11例は(40)(41)(42)のように〈程度のはなはだしい様子〉を表す意味で用いられている。

- (40) べつに学生運動について深く考えたことがあるわけではないが～。

純（『僕って何』 p. 13）

- (41) 思い出がヴィッラ・Kとあまりにも深く結びついているため～。

純（『レッスン』 p. 6）

- (42) 深く哀傷を沈めている表情は、～。 推（『生者と死者』 p. 63）

「深く」は、主観的なニュアンスを感じさせるために、ノン・フィクションのような無色の内容にはあらわれにくいのだと思われる。

5. まとめ

各ジャンルの平均から見て、客観的な描写が多いノン・フィクションを除く純文学系、推理小説、SFのジャンルでは、装定用法が3つの用法のうち最も高い割合を占めていることがわかった。当然4つのジャンルのすべての平均も装定用法が最も高い割合を占めるが、このことは形容詞の3つの用法のうち装定用法が中心的用法であることを示しているといえよう。

また、純文学系を除くジャンルでは、推理小説の『生者と死者』以外はすべて連用用法の占める割合が約23%と最も小さくなっている。純文学系でもその平均は29%であり、他のジャンルの平均と大差ない。これは、連用用法になる形容詞の数が限られていることや、動詞の修飾は本来の副詞がその多くを担っているためかもしれない。

仁田(1983)が動詞にかかる副詞的成分を結果の副詞、様態の副詞、評価づけの副詞など8つに分類しているが、この中で程度性の副詞や様態の副詞の例として形容詞の連用形を多くあげている。今回の資料の分析からも、形容詞の連用用法には、程度性の副詞や様態の副詞に分類される例が多いことが明らかになった。

一方、ジャンルによって連用用法のあらわれやすい形容詞があり、また、同じ形容詞の連用形でも、共起する動詞が異なる意味のグループであったり^(註4)、意味的には類義関係にありながらフォーマリティが違ったりすることがわかった。特に、ジャンルによる違いで注目されることは、純文学系、推理小説、SFの3つのジャンルとノン・フィクションというジャンルでは使用される形容詞が異なることである。これはノン・フィクションのみが虚構のない作品で、客観的な表現が多いためであろうか。

今後の課題としては、ジャンルのたてかたの検討をし直し、さらに資料をもっと増やすことが必要であろう。また、本来の副詞と形容詞の連用形による動詞の修飾(本稿の連用用法)がどのような役割分担をしているかという

ことも大切な問題だと思われる。形容詞を属性形容詞と感情形容詞に分類したときに、連用用法、述定用法、装定用法の頻度に偏りが見られるかどうかということなどについてジャンルと文体との関連においてさらに研究をすすめていかなければならない。

付記：本稿は、1998年11月21日に日本文体論学会第74回大会において「形容詞の連用形の持つ意味——文体との関連において——」と題して口頭発表したものに加筆修正したものである。

注

- (1) 形容詞の機能は、1. 述語となる 2. 連体修飾語となる 3. 連用修飾語となるの3つに分けられるが、本稿では1を述定用法、2を装定用法、3を連用用法と呼ぶ。
- (2) 仁田（1998）では、動詞と形容詞の述定用法と装定用法の頻度と比較しているが、形容詞の本領は名詞を修飾限定する装定用法にあるとしている。
- (3) 仁田（1998）では、形容詞を属性形容詞と評価・判断形容詞、感情・感覚形容詞の3種類にわけて述定用法と装定用法のあらわれ方を調べているが、評価・判断形容詞と感情・感覚形容詞は述定用法が装定用法の倍ちかくあるとしている。
- (4) 3つの用法がすべての形容詞の、すべての意味に見られるわけではないことは橋本・青山（1992）にくわしい。

参考文献

- 秋元 美晴 「形容詞の装定用法と述定用法」（『林巨樹先生古稀記念甲戌論集』）武蔵野書院 1996
- 川端 善明 「用言」（『岩波講座 日本語6 文法1』）岩波書店 1976
- 国立国語研究所 『分類語彙表』秀英出版 1964
- 清水由美子 「形容詞連用形による連用修飾」（『文学・語学』第151号）1996

- 中村 明 『日本語の文体——文芸作品の表現をめぐって——』 1993
- 西尾 寅弥 『形容詞の意味・用法の記述』 秀英出版 1972
- 仁田 義雄 「動詞にかかる副詞的成分の諸相」(『日本語学』 vol. 2 10月号)
明治書院 1983
- 仁田 義雄 「日本語文法における形容詞」(『月刊 言語』 vol. 27 No. 3) 大
修館書店 1998
- 橋本美奈子・青山 文啓 「形容詞の三つの用法：終止, 連体, 連用」(『計量
国語学』 18 卷 5号) 1992
- 飛田 良文・浅田 秀子 『現代形容詞用法辞典』 東京堂出版 1991
- 宮島 達夫 「形容詞の語形と用法」(『語彙論研究』 所収) むぎ書房 1994
- R. ソーントン 「形容詞の連用形のいわゆる副詞的用法」(『日本語学』 vol. 2
10月号) 明治書院 1983